

伊豆大島火山: 史料に基づく最近3回の大規模噴火の 推移と防災対応

津久井雅志*・段木一行**・佐藤正三郎***・林幸一郎****

(2008年9月3日受付, 2009年5月21日受理)

Izu-Oshima Volcano: Precise Sequence and Mitigation Program of the Latest Three Large-Scale Eruptions Revealed by Historical Documents

Masashi TSUKUI*, Kazuyuki DANGI**, Shozaburo SATO*** and Kouichiro HAYASHI****

Inflation of Izu-Oshima volcano has been observed since soon after the latest middle-scale eruption occurred in 1986. Such deformation is understood as re-storage of magma beneath the volcano. Because more than 230 years have passed since the last large-scale eruption in 1777, Izu-Oshima is overdue for an average recurrence interval of large-scale eruptions, 100 to 150 years.

Preparing for the forthcoming eruption, we aim to improve the resolution of volcanic activities in historic time. Archives on historical eruptions, as well as topography, and stratigraphy of the volcano are reviewed. The results are summarized as follows. (1) Based on historical archives as well as stratigraphy of the volcano, we reviewed sequences of Y_3 (1552 Ten'bun), Y_2 (1684 Jokyo) and Y_1 (1777 An'ei) eruptions. All these three eruptions occurred inside the caldera and proceeded in the order of scoria fallout - lava effusion - ash fall, which is the typical sequence in Izu-Oshima. Duration of main eruption stage, start from basal scoria eject to lava effusion, ranges from 1 to 2 weeks in Y_3 and Y_2 eruptions, to 14.5 months in Y_1 eruption which is bigger than the former two. Those of magma-withdrawal stage, ash-fall stage, lasted 6 years in Y_2 and 9 years in Y_1 , respectively. (2) In Y_1 eruption (1777-1792), the local government of Izu grasped the sequence of volcanic activities by frequent reports from the island and by inspections of government officers. The local government submitted reports and mitigation programs to the central government. (3) In case of future large-scale eruption occur in caldera, accurate information of magma-head level is indispensable for the prediction of eruption behavior. (4) We pointed out the significance of topographic lows on the northwestern and the northern flank to predict the flow of lavas.

Key words: Izu-Oshima volcano, historical eruptions, historical documents, sequence of an eruption, hazard mitigation program

1. はじめに

伊豆大島火山は東京の南南西約100 kmの伊豆・小笠原弧の北部、火山フロント上に位置する主に玄武岩からなる成層火山である (Fig. 1)。最新の噴火は1986年11月15日に山頂で始まり、同21日には北西山腹で割れ目

噴火が起こった。割れ目噴火は500年ぶりの出来事であった。噴火後1989年ころからは山体の膨張が継続しており (国土地理院, 1996)、次の噴火へ向けてマグマが地下に着実に蓄えられていると考えられる (村上, 2007など)。

* 〒263-8522 千葉県稲毛区弥生町1-33

千葉大学大学院理学研究科
Graduate School of Science, Chiba University, Inage-ku, Chiba, 263-8522 Japan.

** 元法政大学文学部

the former affiliation: Faculty of Letters, Hosei University

*** 〒278-0037 千葉県野田市野田370-8

野田市郷土博物館
Noda City Museum, 370-8 Noda, Noda, Chiba, 278-

0037, Japan.

**** 〒811-1302 福岡県福岡市南区井尻2-21-36
応用地質株式会社九州支社ジオテクニカルセンター
Kyushu Headquarter, OYO Corporation, 2-21-36
Ijiri, Minami-ku, Fukuoka, 811-1302 Japan.

Corresponding author: Masashi Tsukui
e-mail: tsukui@faculty.chiba-u.jp

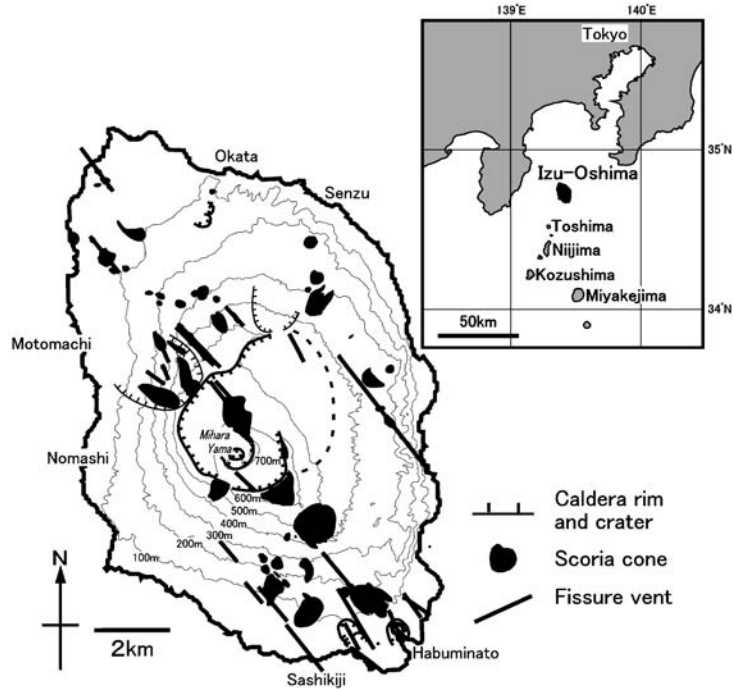


Fig. 1. Map showing topography and distribution of scoria cones, fissure vents, and caldera rims of Izu-Oshima volcano. Topographic contour interval is 100 m.

伊豆大島火山の歴史時代の噴火記録や詳しい地質学的研究、噴火史の研究は震災予防調査会編（1903）、中村（1915）以来、久野（1958）、森本（1958）、Nakamura（1960, 1961, 1964）、田沢（1980, 1981）、一色（1984a, 1984b）、小山・早川（1996）、川辺（1998）らによってまとめられ、公表されている。これらの研究によって、最近約1700年間に噴出量が1億トンを超えるような大規模噴火が平均して100～150年に一度起きてきたことが明らかにされた。

最新の大規模噴火が始まった1777年からすでに230年が経過し、大噴火の平均再来間隔はすでに過ぎている。この間1876-77年、1912-14年、1950-51年、1986年に中規模の噴火があったが、それぞれ大規模噴火よりも一桁小さい数千万トン程度の噴出量であった。したがって次の噴火が大規模噴火となる潜在力を無視できず、現時点で大島火山の大規模噴火の推移を総括しておくことは火山学の面でも、また防災の面からも意義がある。

我々は16世紀以降の3回の大規模噴火について、活動推移の時間・空間的解像度をあげるよう史料と若干の野外調査により再検討を行ない、いくつかの新たな知見を得た。従来の研究を本質的な部分で大きく変えるものではないが、今後の噴火に対応する前にあらかじめ知って

おくべき点があると考え、以下に報告する。

2. 伊豆大島火山の噴火史および地質の概要

大島火山の中央部には、北東方向に開いた径4kmのカルデラがあり、その南西部に比高160mの中央火口丘三原山（標高764m）が存在する（Fig. 1）。カルデラは約1500～1700年前に形成されたと考えられている（一色, 1984b; Nakamura, 1960, 1964; 山元, 2006）。

Nakamura（1964）は大島火山先カルデラ期初期の浅海のマグマ水蒸気噴火を主とする噴出物を泉津層群、陸上の噴火堆積物を古期大島層群と区分し、カルデラ形成および後カルデラ火山の噴出物を新期大島層群に区分した。新期大島層群の堆積物について、噴火による堆積物と休止期の堆積物を一噴火輪廻に由来する一組の地層として部層と定義し、 $Y_1 \sim Y_6$ 部層（湯場層）、 $N_1 \sim N_4$ 部層（野増層）、 S_1 , S_2 部層（差木地層）の12部層を識別した（Table 1）。また、大島の大規模噴火による1回の噴火輪廻では基底スコリア降下→（溶岩流→）火山灰降下の順に推移することを強調した。

田沢（1981）はこの考えを古期大島層群に適用して O_1 から O_{95} までの95部層を認定した。その後、小山・早川（1996）は、短い噴火休止期に堆積した風成の堆積物

(「レス」)をも厳密に識別して、新期大島層群中に1986年噴火も含めて24回(うち割れ目噴火を含むもの11回)の噴火イベントを確認した。

3. 大噴火の時期、噴火の推移に関する再検討

3-1 最近3回の大規模噴火

伊豆大島の大規模噴火は最も新しいものでも1777年に始まる安永噴火なので、大噴火に関する情報は、観測

によるものではなく、もっぱら地質・岩石学的な調査や史料に基づいている。大島の噴火を記した文書による情報は江戸時代になると増加して、記述と噴火堆積物の対比が可能になり、噴火の推移に時間軸が入れられるようになる。著者らは、天文二十一年(1552年)¹噴火、貞享元年(天和四年二月改元; 1684年)噴火、安永六年(1777年)噴火を記した文書を精査した。

3-2 天文二十一年壬子(1552年)噴火

3-2-1 天文噴火の史料

元町薬師堂に保存されていた木札には1552年(天文二十一年)に噴火したことを示す記述が知られている(稲村・金山, 1959; 現在大島町郷土資料館に展示)。木札には「右彼祈念者天文廿一年壬子九月十九日(ユリウス暦1552年10月7日)ニ御原ヨリ神火出テ同廿七日(同月15日)ノ夜半江津ニ嶋ヲ焼出給、江津ノ池即チ嶋トナル、然ニ其勢難詞宣嶋鳴動スル事六種震動シ火炎双天ニ上テ雲霞暗蔽トシテ日夜無勝劣シ、人民驚怖ヲナシ嶋ノ人間難堪忍シ其時下田ヨリ真言阿闍梨嶋へ渡海秘法ヲ祈念ス、即神火静ト云」と書かれている。

3-2-2 木札にある「江津」の位置の推定と活動推移

Nakamura (1960, 1964) 以来、層位からY₃部層が1552年(天文二十一年)の噴火に対応すると考えられてきた。一色(1984a)は木札の記述を、①1552年10月7日(天文二十一年九月十九日)に御原(三原)から噴火が始まり、10月15日(九月二十七日)「江津」という所に新しく島ができた。②地震・空振が激しく起こり、火映(?)が天高くあがった。③噴火活動の継続期間は明記されて

Table 1. Volume and mass of Younger Oshima Group (after Nakamura, 1964; Sakaguchi, *et al.*, 1987). Eruption years of S₂, N₂, N₁, Y₆ are revised after Yamamoto (2006) and Tsukui *et al.* (2006). Dense Rock Equivalent (DRE) is calculated assuming magma density of 2.7g/cm³.

Member/year	Volume of erupted material (km ³)			Total mass (10 ⁶ ton)	D.R.E. (km ³)
	scoria	lava	ash		
1986	0.0173	0.019	—	0.58	0.021
1950-1951	0.0036	0.023	—	0.59	0.022
1912-1914	0.0026	0.03	—	0.75	0.028
1876-1877	0.002	0.001+	—	0.04+	0.001+
Y ₁ 1777-1792	0.035	0.14	0.17	6.5	0.241
Y ₂ 1684-1690	0.028	0.08	0.08	3.5	0.130
Y ₃ 1552	0.017	0.14	0.036	4.2	0.156
Y ₄ 1421?	0.09	0.13	0.15	6.5	0.241
Y ₅ 1338?	0.013	0.13	0.11	5.1	0.189
Y ₆ 12 th C?	0.063	0.125	0.041	4.4	0.163
N ₁ 9 th C	0.04	0.125	0.27	7.6	0.281
N ₂ 9 th C	0.0043	0.125	0.16	5.5	0.204
N ₃ 9 th C	0.027	0.125	0.048	4.2	0.156
N ₄ 8 th C	0.43	0.125	0.12	9.2	0.341
S ₁ 7 th C	0.0063	0.125	0.08	3.4	0.126
S ₂ 4 th C?	0.0027	0.016	0.13	2.4	0.089

Table 2. Sequence of recent large-scale eruptions Y₁, Y₂ and Y₃ of the Younger Oshima Group.

Eruption	Member	Date of Beginning			Year of End
		pele's hair, basal scoria	lava	ash	
1777 (An'ei)	Y ₁			1783, Nov. 25 (Ten'mei 3, XI, 2)	1792 (Kan'sei 4)
			III: 1778, Nov. 14 or 15 (An'ei 7, IX, 26 or 27); 1778, Nov. 6 (An'ei 7, IX, 18)		
		II: 1778, Apr. 19 (An'ei 7, III, 17)	II: 1778, Apr. 21 (An'ei 7, III, 19)		
	I: 1777, Aug. 31 (An'ei 6, VII, 29)				
duration	7.5 months	7 months	9 years		
1684 (Jokyo)	Y ₂	1684, Mar. 31 (or 29) (Jokyo 1, II, 16 (or 14));	by 1684, Apr. 11 (by Jokyo 1, II, 27)	1684, Aug. 29 (Jokyo 1, VII, 19)	1690 (Genroku 3)
		< 14 days	< a couple of days	6 years	
1552 (Ten'bun)	Y ₃	1552, Oct. 7 (Ten'bun 21, IX, 19)	1552, Oct. 15 (Ten'bun 21, IX, 27)	?	?
		8 days	< a couple of days	?	

¹以下、和暦は漢数字で、西暦はアラビア数字で示す。和暦から西暦への変換は加唐(1993)によった。1582年以降はグレゴリオ暦、その前はユリウス暦による。

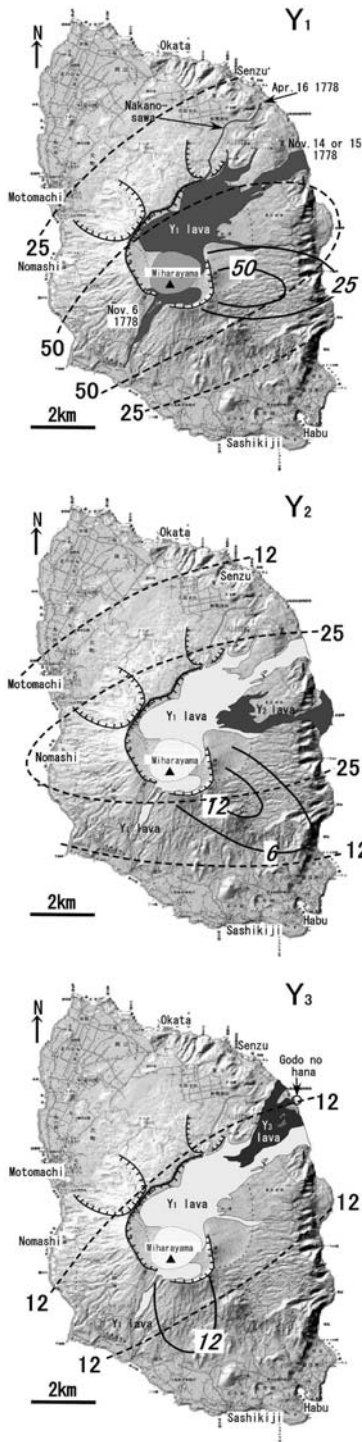


Fig. 2. Thickness of basal scoria, ash (in cm) and lava distribution of Y₁, Y₂ and Y₃ members, compiled from Nakamura (1964), Isshiki (1984b), Koyama and Hayakawa (1996) and Kawanabe (1998). Solid line: basal scoria; broken line: ash layer.

いないが、この木札が奉納されたのが噴火開始約1ヶ月後の天文二十一年十月二十六日であるから主な活動はそれ以前に終わっていたのであろう、と考えた。

これまでの解釈では木札に書かれた「江津」がどこを指すのか明らかではなかった。著者らが、島内の地名との対応を検討したところ、泉津地区の海岸にある「ゴードーの鼻」(Figs. 2, 3 ○印)は文化十二年(1815年)測量の伊能特別大図では「ゴウド根」・「ゴウド崎」と表記され、また『文政十年(1827年)大島村々書上帳』で泉津の海岸の地名として「ごうとの鼻」と記載されている(図はない)のを見出した。静岡県では「三津」のように「津」を「と」と読むことがあるので、ゴードー(ごうと)の鼻が「江津」にあたる可能性がある。この推定が正しければ「江津」は、Y₃溶岩流が海岸手前で停止して覆い残した部分(一色, 1984b; 川辺, 1998)にあたる。木札に記述された1552年の地変をY₃部層に対比する従来の説を支持することになる。しかし「江津ノ池即チ嶋トナル」というのが、海に溶岩が流れ込んで島を形成したのを指すのか、「江津」付近だけ流れ残したのを「島」にたとえたのか、依然不明である。

この噴火は新时期大島火山の大規模噴火に典型的な、基底スコリア→溶岩流→降下火山灰の順に噴出したと考えられている(一色, 1984a, 1984b; Nakamura, 1960, 1961)。木札の記述は、噴火が開始した1552年10月7日から8日目の10月15日には、流下した溶岩が海岸まで達していたと解釈できる。溶岩の上位に火山灰が堆積している層序関係を野外で確認できるが、火山灰降下を主とする時期の開始、終了を史料から特定することはできない。

この噴火の防災・復興の記述はなく、伊豆下田から真言阿闍梨が渡海し祈念した記録だけが残されている。

3-3 貞享元年甲子(天和四年二月改元; 1684年)噴火 3-3-1 貞享噴火の史料

江戸時代、伊豆諸島は伊豆国に属し、幕府直轄地として韮山の代官が治めていた。噴火の経緯は、島役人と代官所、幕府勘定所との間で報告、御尋(照会)、実況検分、災害支援が適宜行なわれ、公文書として残されるようになる。

1684年(貞享元年二月)から7年間続いた噴火は貞享噴火と呼ばれる。この噴火の様子は『甘露叢』、『徳川実記(常憲院殿御實記卷九)』、『熱海名主代々手控抜書』に記録されたほか、『伊豆七島明細記』に代官所から勘定所へ宛て貞享元年七月、八月の状況を報告した文書の覚え、大島からの注進書の覚えが採録されている。安永噴火を記録した『安永七年島方御用留』、『大島山火記』の中にも過去の噴火記録として貞享噴火の概要が示されている。一色(1984b)、Nakamura(1960, 1961)は地質調

査の結果からこれら文書の記述はY₂部層に対応する噴火を記録したものと考えた。以下、史料・地質調査から推定された推移を述べる。

3-3-2 貞享噴火の推移

噴火は、グレゴリオ暦1684年3月29日(貞享元年二月十四日、『熱海名主代々手控抜書』)ないし1684年3月31日(貞享元年二月十六日、『安永七戌年島方御用留』および『大島山火記』十一月付文書(付録史料22)に収録)に三原山御洞(火口)から始まり、4月11日(二月二十七日)まで止まなかった(『甘露叢』、『徳川実記(常憲院殿御實記卷九)』)。噴火開始とともにスコリアの噴出があり、溶岩の噴出も噴火開始後10日以内に起こった。溶岩は東北東に流下して海に達し、海中に広がった。噴火に伴う鳴動・地震によって、民家の器財にかなりの損害があった。

同年8月29日(七月十九日)から秋にかけても、爆発音が時々聞かれ、降灰があった。噴火開始5ヶ月後に降灰期に移行したことが推定される。1684年9月15日(八月六日)時点で降灰の厚さは山中で1m余(三四尺)、集落の近くで60-25cm(二尺一尺四五寸又ハ八九寸)に達していた(『伊豆七島明細記』)。翌1685年も降灰は続いた(『熱海名主代々手控抜書』)。その後、活動は次第に穏やかになり1690年(元禄三年)になって終息した(『安永七年島方御用留』、『大島山火記』など)。降灰期は約6年間続いたと解釈できる。

3-3-3 貞享噴火による災害と支援

噴出物により島内の田畑・山林は埋没し、椿などの樹木も折れ、野牛・野馬は食料不足のため死亡した(『熱海名主代々手控抜書』)。噴火による不作が深刻なため、貞享元年(1684年)70日分、貞享三年(1686年)200日分、同五年(1688年)180日分の食糧が支給(被下置)された(『天明九年大島差出帳』)。

3-4 安永六年丁酉(1777年)噴火

3-4-1 安永時代の支配と噴火史料

安永噴火当時、江川太郎左衛門(英征)が代官であった。安永噴火の経緯は、島役人、(韭山と江戸にあった)代官所、幕府勘定所の間で交わされた公文書記録が相当量にのぼり、高い時間分解能で復元できる。従来、安永噴火の最も信頼できる史料として、代官から勘定所へ提出された記録を集めた『大島山火記』(水戸彰考館本;震災予防調査会編(1903)に収録)が重用されてきた。今回、勘定所へ提出した報告の控えである(財)江川文庫所蔵(国文学研究資料館へ寄託)『安永七戌年島方御用留』(一部は大島町史編さん委員会編、2000に収録)、『安永七戌年御用留』、『天明三卯年島方御用留』を新たに検討し、また天明九年(1789年)および弘化三年(1846年)

時点で島の概況を取りまとめて代官所へ提出した『天明九年大島差出帳』、『弘化三年大島差出帳』(いずれも東京都大島町史編さん委員会、2001に収録)、利島から代官所へ支援を願い出た文書(伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会、1981;利島村学術研究委員会歴史部会編、2004に収録)等もあわせて検討した。噴火の報告書中には避難の計画も含まれていたことを確認した。

以下、詳しく経過を述べ、付録に新史料として『安永七戌年島方御用留』、『安永七戌年御用留』、『天明三卯年島方御用留』の安永噴火関連の部分を示す。またこれらに含まれていない『大島山火記』の関連記事も内閣文庫本に基づき示した。なお、新史料の翻刻は津久井、佐藤、段木が担当した。

3-4-2 安永噴火の推移

噴火は1777年8月(安永六年七月)に始まり、1792年(寛政四年)ころまで続いた。カルデラ形成およびそれ以降の12回の大規模噴火のうちでもN₄、N₁噴火に次ぐ規模の大きなものであり、噴出した溶岩と降下火砕物は東海岸にまで達するものであった(一色、1984b;川辺、1998;小山・早川、1996;Nakamura, 1960, 1964)。これまで、噴火活動は第I期から第IV期(震災豫防調査会、1918;森本、1958)と、その後の降灰を主とする活動期に分けられていた。今回の検討の結果、『大島山火記』の報告中の“第IV期”(森本、1958;震災豫防調査会、1918)とした活動は第II期の活動を誤って記録した可能性が高く実際には活動がなかったこと、安永噴火の最盛期は噴火開始直後ではなく、7.5ヶ月経った第II期(安永七年三月中~下旬)とさらにその7ヶ月後の第III期(安永七年九月)であったことなどがわかった。第I期から第III期までの噴火期と、降灰期が始まるまでの間に、5年の休止期間があった。降灰期は9年間におよび、火山灰は広い範囲に厚く堆積した。

結局、3回流下した溶岩は、いずれも居住地へは向かわなかったが、降下スコリア、降下火山灰が野増(50cm以上)、元町・泉津(それぞれ20~30cm)に堆積したために、農業・漁業などは大きな打撃をうけた。島から提出された文書からは、支援の願い出とその実績が示されており、被害の大きさを間接的に窺うことができる。

以下に各期の活動の様子を詳しく述べる。

前兆現象

噴火前に異変があったか、なかったかを含め、記録はない。

第I期

1777年(安永六年丁酉)

8月31日(七月二十九日)夕方、1684年貞享噴火の際に大きく開口したといわれている山頂火口から噴火が始

まった。開始当初、爆発音が繰り返し聞かれ、地震も時々あった。時折、黒白の色をした長さ3-10cmの火山毛、および、小さい「かなくそ」の様なスコリアが降下した。火山毛は全島に、火山礫は2,3ヶ村に降下した。3cm(一寸)も積ったところはなく、「蜘蛛の巣」程度。日中は噴煙のみしか見られないが、夜には山上一面が赤く輝いていた(史料1, 2, 3)。

森本(1958)は「安永六年西七月二十九日三原山御洞焼出口壱ヶ所」との記述から、火口からの溶岩流出の可能性があったとしたが、はっきりしない。

9月7日(八月六日)朝より夜中まで、降雨中にもかかわらず炎、焼発音(「焼音」)が強かった(史料1)。

9月8日(八月七日)音強く、たびたび降灰、地震があった(史料1)。

9月12日(八月十一日)まで鎮まらなかった(史料1)。

9月26日(八月二十五日)頃まで続いたが(史料3)。

9月28日, 29日(八月二十七日, 二十八日)爆発音・地震は止み、降灰はなかった(史料3)。

9月30日(八月二十九日)には降雨中にもかかわらず再び盛んになり(史料3)。

10月6日(九月六日)暁から、噴火が一段と盛んになり、噴煙が著しく、爆発音が雷のようであった。たびたび地震があった(史料3)。

10月8日, 9日(九月八日, 九日)9日夕方まで大風雨だったが噴火が強かった。9日暮れから雨風止んだが火勢強く、爆発音もますます強くなった(史料3)。

10月12日(九月十二日)朝までは変化なく、「砂交じり焼石」が降下したが、灰は降らなかった(史料3)。

11月28日(十月二十九日)から鳴動・爆発音が強くなり、時々細粒の「焼砂」が降った(史料4)とあるが他の文書との整合性から「十月」は七月の誤りではないかと疑われる(史料22)。

1777年夏からのこの噴火活動は江戸(東京)からも見られ、『武江年表』安永六年の項に「夏より伊豆大島焼始め、南海へ火燃出る。品川沖にて夜々火光、天に映ずるを見る。」とある。

1778年(安永七戊戌年)

2月7-16日頃(正月中旬)に噴火は激しくなった(史料4)が、

2月17-26日頃(正月下旬)にはやや穏やかになった(史料4)。

第Ⅱ期

1778年(安永七年)

4月19日(安永七年三月十七日夜)より21日(十九日)

夜まで、爆発音厳しく、「灰交じりの黒い砂」が降り、「大石」で山を築き上げた。昼間でも夜のように暗かった(史料5, 6)。基底スコリアの主要部分と三原山スコリア丘の主体が形成されたものと考えられる。この活動に伴い北西のカルデラ床から初めて溶岩の流出が起こり、中ノ沢に沿って「長一里(4km)程幅拾間程(18m)深サ拾五六間(30m)」(史料22)にわたり沢を埋め、泉津地区の葉地釜(波治加麻神社付近)のわずか上流まで達した(Figs. 2, 3)。ただし、人家から隔たった場所であったためか、その日付は4月21日(三月十九日; 史料6)、4月23日午前10時頃(三月二十一日屋四時比; 史料5)、4月24日(三月二十二日; 史料22)と報告により異なるが、二十一日に出島した役人によって急報されていること(史料5)から、少なくとも二十一日には流下していた。基底スコリア層中に含まれる花粉の解析から、スコリアの噴出は春であったとされており(遠藤ほか, 1994)、史料の記述(史料5, 6, 22)と整合的である。

5月末~9月末(五月から閏七月を含み、八月上旬まで)は降灰、火映もなく、人心も落ち着いて、山仕事も行われた(史料7, 8)。

第Ⅲ期

1778年

10月27日(安永七年九月八日)から、再び三原火口の活動が激しくなってきた(史料9, 10)。

11月6日(九月十八日)再び溶岩の流出が起こった。火口から南西方に流れた溶岩が野増村、差木地村間の赤沢に流れ込んで停った。鳴動・噴煙が著しかった(史料10, 22)。その溶岩流の規模は、「三原山御洞^{より}字赤沢 但長壺里半(6km)程、幅七八間(15m)、深さ三拾間(55m)程」(史料22)と記されている。なお、『天明二年七島巡見志』(大島町史編さん委員会編, 2001, 32p)には「且燃出候口ハ御煩^と唱、右之場所前ニハ甚深キ洞ニ御座候処、今度之焼ニテ石砂噴出し、御見分之通右洞も浅ク相成」と、三原火口がこの噴火で浅くなったと解釈できる記述がある。

11月15日あるいは14日(安永七年九月二十七日あるいは二十六日²)、また三原山火口から北東の方向に溶岩の流出が起こった。外輪山との間の火口原の北半を埋め、東に向かって流下して、海に達した(史料11, 13, 22)。

抹消すべき活動期

森本(1958)、震災豫防調査會編(1903)は、『大島山火記』安永七年十一月の「三原山ヨリ凡二里程隔泉津村ノ

² 溶岩が流下した日付は、『大島山火記』水戸彰考館本、内閣文庫本は九月廿七日、狩野文庫本は九月廿六日、『安永七戌年島方御用留』(史料21)は廿六日と廿七日が混在する。

内字葉地釜ト申所ヨリ煙立火燃出候」という記事から、十一月十七日³ (1778年1月4日) 夜から、噴火が激しくなり、泉津村字葉地釜付近で溶岩流の一部から二次的の流出があったのを記録したのかも知れない、と考えた。

しかし、これまで安永七年十一月とされていた『大島山火記』の記事は、『安永七戌年島方御用留』三月の記事と同文(史料5)で、三月の活動記事は『安永七戌年御用留』四月付記事(史料6)の内容と整合的である。また、『大島山火記』十一月の記事には「当月六日、十四日両度出島役人より」注進があった、という記述があるが、安永七年十月二十三日から十一月十二日まで代官所手代柏木直佐衛門が渡島し見分しており(史料16, 17, 18, 19, 20, 『天明九年大島差出帳』)、手代在島中に代官所へ注進するのは不自然である。さらに、史料25下線⁴には、手代が江戸へ出立後は風向き・海況が悪く、手代自身伊豆半島川奈へ着船後、江戸へは陸路をとったこと、この間大島からは江戸に着船していないことが記されている。したがって『大島山火記』十一月の記事は三月の報告を誤写した可能性が高く、十一月とされる活動は抹消すべきであると判断した。

1779年(安永八年)の活動を記録した文書はなく、活動は一時中断したらしい。それを裏付ける記録も残されている。1781(安永十年=天明元年に改元)~1782年(天明二年)に幕府普請役佐藤玄六郎行信と代官所手代吉川義右衛門秀道による伊豆諸島の巡見が行われた(『天明二年七島巡見志』)。この巡見は、特に噴火実況見分を目的としたものではなく、各島現況の視察と書面の収集・調査を目的としたものであった。安永噴火が一段落して平穏であった伊豆大島および1780年噴火の翌々年の青ヶ島の見分記事からは噴火が緊迫した状況にあるようには読み取れない。

降灰期

この後1783年11月25日~27日ないし28日(天明三年十一月二日~四日(『天明三卯年島方御用留』(史料26)), ないし五日(『天明九年大島差出帳』, 『弘化三年大島差出帳』)に噴火が再開し、大量の降灰があった。先年程ではなかったけれども島中に砂が降って、麦や葉物野菜に積もり、硫黄の気が強く葉が枯れた、と記録されている(史料26)。天明四年四月二十七日から六月六日まで普請役の川島彦蔵が噴火現況を視察し、同時に瓦職人を同行させ土質の調査を行なった(『天明九年大島差出帳』, 『弘化三年大島差出帳』)。1784~86年(天明四~六年)、1789年頃(寛政元年頃)にも、しばしば降灰があっ

た(『南方海島志』)。大島の南南西20km、北東卓越風の風下側にあたる利島(Fig. 1)にも、降灰期に火山灰が降下した(伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会, 1981, p214-218; 利島村, 1996, p298-305; 利島村学術研究委員会歴史部会編, 2004, p5-12, p39-50, p53-59)。1792年(寛政四年)秋に至って初めて静穏に帰し、16年間にわたった安永大噴火が終了した。

降灰総層厚は「四五尺」(1.2~1.5m; 小山・早川(1996)による測定結果はFig. 2参照)に達し、人家の損傷も大きかった(『伊豆七島明細記』, 『南方海島志』)。降灰による打撃は、溶岩、スコリアと同様ないしそれ以上に大きかったらしく、噴火にともなう農業・漁業の不作・不漁に対し、大島へは主噴火期の1778年(安永六年十一月から食料170日分給与)、1779年(安永八年正月から食料148日分給与)と廻船の更新費用貸与に加えて、1784年に2回(天明四年四月および九月)、1785年(天明五年)、1787年(天明七年正月)、1791年(寛政三年)にも穀物購入用の財政支援(3分の2給与と3分の1貸与)があった(『天明九年大島差出帳』, 『弘化三年島差出帳』)。

利島でも1785年6月~7月(天明五年五~六月)、1786年9月8日~12日、11月15・16日(天明六年八月十六~二十日、十月二十五・二十六日)天明六年冬から翌七年春にかけて北風の際にしばしば降灰があり、農作物が受けた壊滅的な被害の状況を代官所へ訴え出た。天明五年九月には食糧150日分相当の66両余、天明七年八月には48両余の支援金が、それぞれ3分の2給与、3分の1貸与として渡された(『麦作大凶作ならび大島山焼砂降につき夫食御拝借歎願一件書留』, 『御救御拝借御願一件留帳』, 『御救御拝借小前請取帳』; 伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会, 1981, p214-218; 利島村, 1996, p298-305; 利島村学術研究委員会歴史部会編, 2004, p5-12, p39-50, p53-59)。

噴火前の安永三年(1774年)と噴火がようやく終息に向かった天明九年(1789年)の大島の村別人口を比べると、島全体の人口は2.5%減少している。降灰の多かった野増村・泉津村で特に人口の減少が目立ち、逆に降灰の少なかった差木地村の人口は増加している(Fig. 2, Table 3)。

3-4-3 代官所の作成した防災避難計画

伊豆代官所は、勘定所からの現況および避難対応についての「御尋」と見分の指示(史料15, 16)を受けて、手代柏木直佐衛門を急派し(史料17~19)、安永七年十月二十日~十一月十二日に見分をおこなった。見分、島

³ 加唐(1993)によれば、安永七年十一月十七日、二十一日のグレゴリオ暦への変換は、1798年12月14, 18日(震災予防調査会, 1918; 森本, 1958; Nakamura, 1960; 一色, 1984a; 気象庁編, 2005)ではなく、1779年1月4, 8日(Nakamura, 1964)になる。

Table 3. Population and number of cargo boat in Oshima Island in the 18th century.

Year		Population						Cargo boat	Ref.
A.D.	Japanese calendar year	Niijima (Motomachi)	Okata	Sashikiji	Senzu	Nomashi	Total		
1749	Kan'ei 2	1101	321	135	94	143	1794	13	1
1774	An'ei 3	1323	416	164	99	227	2129	23	2
1778	An'ei 7						2298		3, 4
1781	An'ei 10 (=Ten'mei 1)						2336	21	5
1789	Ten'mei 9	1251	389	190	79	167	2076	23	6
(population in 1789)	/ (population in 1774) (%)	94.6	93.5	115.9	79.8	73.6	97.5		

References: 1. 『寛延二年大島差出帳』 (official documents submitted from Izu-Oshima in 1749). 2. 『伊豆国附嶋々様子大概書』 (documents about Izu Islands submitted to the central government (submitted from the Local government of Izu in 1774)). 3. 『安永七年島方御用留』 (duplicate of documents on Izu Islands submitted to the central government in 1777 (the Local government of Izu)). 4. 『大島山火記』 (official documents on Izu-Oshima eruption in 1777-1778 (submitted from the Local government of Izu)). 5. 『七島巡見志』 (Inspection report of Izu Islands in 1781-82). 6. 『天明九年大島差出帳』 (official documents submitted from Izu-Oshima in 1789)

役人たちへの照会の結果と、それを基に作成した避難計画を十一月二十五日、十二月に勘定所へ提出した (史料 22, 23, 25)。緊急時の実行可能性に疑問がないわけではないが、最悪の事態に備えて避難を想定した計画を用意したことは評価できる。

史料 22, 23, 25 のうち防災対応に関する記述は以下のようにまとめられる。

① 三原山と新島村 (現在の元町)・岡田村 (岡田) との間を「よせ之腰」(カルデラ縁の高まり) が隔てているので、「急難」の恐れはまずないだろう。しかし、三原山と差木地・野増・泉津の 3 村の間には溶岩流の障壁になる高まりはない。これらの村の島民が新島村へ引移る件を検討したけれども、当時は噴火も沈静化していること、引移ると山・畑から離れて生計が成り立たなくなること、仮住居を準備するには費用がかかるので、当面は差し置いてほしい旨の願い出が島民からあった (史料 22 下線^{※a}, 史料 25 下線^{※h})。

② 噴火が激しくなった際には新島村へ、たとえ費用がかかっても新島村へ引移らせるつもりである。陸上の避難路が不通の場合は廻船 (荷物運搬用の船)・漁船で引移らせるよう役人に申渡した (史料 22 下線^{※b}, 史料 25 下線^{※i})。

③ 当時、島には 518 軒、2298 人の住民が居住しており (史料 21, Table 3), 新島・岡田村にある 20 艘の廻船のうち島には通常 5~6 艘残っている (史料 22 下線^{※c})。廻船および漁船 (30 数艘ほど) で江戸への往来、避難は対応可能である (史料 22 下線^{※d})。具体的な乗船人数を求めた勘定所の問い合わせ (史料 23 下線^{※e}) に対し、廻船 1 艘あたり 200 人、5~6 艘で 1000~1200 人が避難し、さらに漁船 1 艘あたり 30 人、30 艘余りで 900~1000 人

が避難すれば、あわせて全島民が船で一時退避することができ、避難対応については見分の際に島役人に伝えてある (史料 25 下線^{※f})、と回答した。

④ 史料 25 下線^{※g} では緊急の事態に至った際には新島、伊豆半島下田・稲取、神奈川三崎、そのほかのいずれの港でも風向きに応じて乗りつけて江戸あるいは韭山の代官所へ報告すべき旨島役人たちに申し渡してある、とある (この部分は、全島民避難を意図するように読めるが、真意は不明である。また、受け入れ側への周知に関する記述はない)。

⑤ また、新島・利島にはあわせて 19 艘の廻船がある。両島の廻船が江戸へ寄った際に、両島の役人へ大島の緊急時に船を大島へ向かわせるよう申しつけるつもりである (史料 25 下線^{※k})、とある

なお、大島安永噴火による活動が継続している時期に八丈島の南南西 70 km にある青ヶ島火山でも噴火があった。最初の熱水・噴気活動は 1780 年 (安永九年) に始まり、1783 年 (天明三年二月) には噴出物により 61 軒が焼失した。青ヶ島島民は八丈島へ注進によって救援を求め、八丈島から食糧支援を受けるとともに、折り返しの船に乗れるだけの島民が避難した。1785 年 (天明五年三月) にはいよいよ噴火が激しくなったため再度八丈島へ救援を求め、同年四月十二日、二十七日八丈島からの船によって全島民が脱出するという事態になった。青ヶ島名主が噴火の状況を逐次報告した多数の注進書 (『青ヶ島嶋諸覚』)、および代官江川太郎左衛門 (英征) が幕府勘定所に対し島民 202 名 (外流人 1 名) “全員残らず八丈島へ引き取った” として人数分の食料の手当を願い出た文書 (『青ヶ島山焼付八丈島江惣人数引取候付御救伺書』) が残されている⁴。青ヶ島噴火の際に避難計画が事

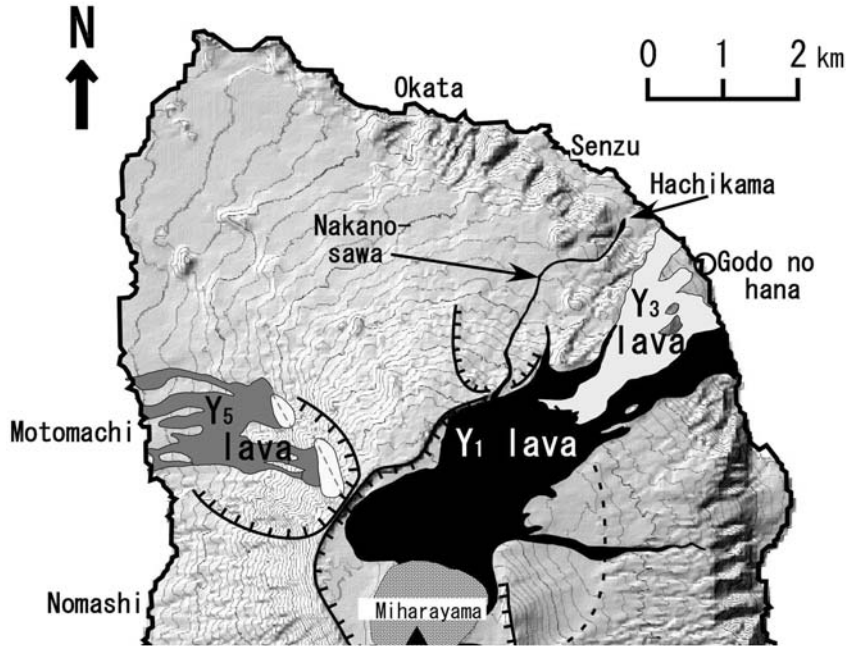


Fig. 3. Distribution of Y₅, Y₃ and Y₁ lavas. These flows are strongly controlled by topographic depressions. Contour interval is 20 m. Note topographic depressions on the southeast of Motomachi town and on the north of caldera rim.

前に特に準備されていた形跡はなく、八丈島の名主、島役人の判断で緊急の避難対応がされたようである。

4. 最近の大規模噴火3回の分解能をあげた活動推移

天文 (Y₃)、貞享 (Y₂)、安永 (Y₁) 噴火はいずれも火口が山頂カルデラ内に限られ、また Nakamura (1960, 1964) の指摘した一噴火輪廻に典型的な、基底スコリア降下→溶岩流出→火山灰降下、という共通した推移が成り立つ。

史料に基づく、天文、貞享噴火では、噴火開始から10日以内に基底スコリアの噴出と溶岩の流下が相次いで起こった。溶岩の流出は史料から読みとれる限り、いずれもおそらく1日ないし2日以内に終了し、一週間に及ぶことはなかった。安永噴火は、噴火の推移にやや時間を要しており、基底スコリアの主体は7.5ヶ月後に降下した。溶岩の流下は合わせて3回、基底スコリアとほぼ同時、その7ヶ月後と8ヶ月後にあった。

最近3回の大規模噴火の際には、溶岩の流出が始まると溶岩は数時間ないし数日以内に山麓・海岸付近まで達している。おそらく溶岩の噴出率が高く一気に流出がお

こったのであろう。安永噴火では海岸付近まで達した溶岩流はカルデラ床に開口した火口から流れ出したものであって、三原山火砕丘の堅穴状火孔を埋めて火口から溢れ出したのではない。おそらく高い噴出率を維持するために山頂火口からの噴出では充分ではなく、カルデラ床に新たな火口を開口したのであろう。中規模噴火であった1950-51年噴火、1986年噴火でもカルデラ床に広く展開したのは、新たに開口した火口からであった。

降灰期に関しては、貞享噴火の際は噴火開始から半年後に（主噴火期の後に目立った記録のない期間4.5か月をおいて）開始し、初期には激しく、やがて断続していき、6年あまり続いた。安永噴火はそれよりも推移がゆっくりで、主噴火期（第Ⅰ期～第Ⅲ期）が14.5か月継続し、5年の間をおいた後に降灰期がはじまり9年間断続した。天文噴火の降灰期の推移は不明である。

天文 (Y₃)、貞享 (Y₂)、安永 (Y₁) 噴火の噴出総量は、Nakamura (1964) によればそれぞれ4.2, 3.5, 6.5億トンと見積もられており（それぞれ噴火休止期に堆積した火山灰も含む）、Y₃, Y₂はほぼ同規模、Y₁の噴出量は前2者の1.5~2倍に達する。地表まで上昇・噴出したマグ

⁴『伊豆国附島々大概書』によれば1774年（安永三年）の青ヶ島の人口は、327名（ほか流人1名）であり、1783年（天明三年）噴火で14名死亡したとする記録（天明三年四月『御注進書之事』、『青ヶ島諸覚』）を考慮しても、八丈島に収容した人数と一致しない。

マが大量であったために収束するのに時間を要した、と見ることができる。

以上のようにとらえると、噴火の推移を予測するにはマグマ頭位が上昇して基底スコリア・溶岩噴出を伴う主噴火期なのか、マグマ後退に伴う火山灰を噴火する降灰期なのか把握すること、あるいはマグマが山体を破壊して貫入しているのかとらえることが必要である。

将来の溶岩の流路を予測する上で留意しておくべき地形を指摘しておきたい。一つはカルデラ北西縁—元町東方の凹地、もう一つはカルデラ北縁湯場北方にある凹地で、いずれも馬蹄形の凹地形であり火口跡と推定される (Fig. 3)。

カルデラ北西の凹地の中では Y_5 , N_4 , S_2 噴火に属する割れ目火口が開いた。トウハチボラスコリア丘もこの中に存在する。この上にはアカホヤ火山灰が堆積しているので、凹地形は 7,300 年前には既に存在していた。ここから流下した Y_5 溶岩の上に現在の元町の中心部が建設されている。数値シミュレーションでも明らかにされている (東京都防災会議, 1990) が、この凹地形の中で側火口が開くれば溶岩が Y_5 溶岩と同様に元町を襲うことが懸念される。

5. ま と め

大島火山の地下にマグマが継続して蓄積していることが地殻変動や地震観測によってとらえられており、次の噴火は確実に近づいている。高密度の観測網により噴火開始の兆候はとらえられることが期待されるが、一旦始まった噴火活動がどのように推移し、終息するのか的確に予測することは火山学的にも社会的にも重要な課題であるにもかかわらず、十分なレベルにまで成熟しているとはいえない。

本報では、将来の噴火に備えて基礎資料を提示することを目的として、歴史時代の文書記録と地質学的な成果から最近 3 回の大規模噴火の推移を、分解能をあげて記述するとともに、安永噴火の際にとられた救援や防災計画等社会的な対応の記録にも触れた。最後にこれまで指摘されていなかった地形的特徴を示して注意を喚起した。

謝 辞

この研究の一部に平成 17~19 年度科学研究費補助金 (17540430) および東京大学地震研究所特定共同研究 B (2006-B-08) による研究費を使用した。匿名査読者 2 名と編集委員及川輝樹氏のコメントは論文を改善する上で有益であった。江川文庫および国立公文書館からは翻刻の許可を戴いた。利島村教育委員会小高広美さんには、

史料の閲覧、複写に便宜を図って戴いた。作図には国土地理院数値地図 50m メッシュ (標高) および杉本智彦氏作成のカシミール 3D を使用した。記して感謝します。

引用文献

- 遠藤邦彦・新川和範・三次福太郎・宮野義則・山口真由美・多田明子・宮原智哉 (1994) 花粉分析に基づく伊豆大島安永噴火の推移 (演旨). 地球惑星科学関連学会 1994 年合同大会, 358.
- 稲村坦元・金山正好 (1959) 社寺史跡史料. 伊豆諸島文化財総合調査報告第 2 分冊 (東京都文化財調査報告書 7), 東京都教育委員会, 821-854.
- 一色直記 (1984a) 大島火山の歴史時代における活動記録. 地調月報, 35, 477-499.
- 一色直記 (1984b) 大島地域の地質. 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅), 地質調査所, 133p.
- 伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会 (1981) 伊豆諸島東京移管百年史 下巻, 東京都島嶼町村会, 1368p.
- 加唐興三郎 (1993) 日本陰陽暦日対照表 (下巻). ニットー. 1545 p.
- 川辺禎久 (1998) 火山地質図 10, 伊豆大島火山地質図 1: 25,000. 地質調査所.
- 気象庁編 (2005) 日本活火山総覧 (第 3 版). 気象庁. 635 p.
- 小山真人・早川由紀夫 (1996) 伊豆大島火山カルデラ形成以降の噴火史. 地学雑, 105, 133-162.
- 国土地理院 (1996) 伊豆諸島の地殻変動. 火山噴火予知連絡会会報, 64, 20-25.
- 久野 久 (1958) 大島火山の地質と岩石. 火山, 3, 1-16.
- 森本良平 (1958) 歴史時代における伊豆大島の噴火活動の概観. 火山, 3, 17-38.
- 村上 亮 (2007) 火山噴火予知に貢献する地殻変動観測. 科学, 77, 1307-1311.
- Nakamura, K. (1960) Stratigraphic studies of the pyroclastics of Oshima Volcano, Izu, deposited during the last fifteen centuries. I. cyclic activity of "main craters" and the absolute chronology of the pyroclastic sediments. *Sci. Pap. Coll. General Educ., Univ. Tokyo*, 10, 125-145.
- Nakamura, K. (1961) Stratigraphic studies of the pyroclastics of Oshima Volcano, Izu, deposited during the last fifteen centuries. II. activity of parasitic volcanoes. *Sci. Pap. Coll. General educ., Univ. Tokyo*, 11, 281-319.
- Nakamura, K. (1964) Volcano-stratigraphic study of Oshima Volcano, Izu. *Bull. Earthq. Res. Inst., Univ. Tokyo*, 42, 649-728.
- 中村清二 (1915) 伊豆大島三原山噴火歴史. 震災豫防調査會報告, 79, 38-56.
- 大島町史編さん委員会編 (2000) 大島町史. 通史編. 東京都大島町, 820p.
- 大島町史編さん委員会編 (2001) 大島町史. 資料編. 東京都大島町, 1088p.
- 阪口圭一・奥村晃史・曾屋龍典・小野晃司 (1987) 伊豆大島火山 1986 年の噴火—地質渡噴火の歴史—. 特殊地質図 26, 地質調査所.
- 震災豫防調査會編 (1903) 大島山火記. 大日本地震史料, 震災豫防調査會報告, 46 甲, 367-376.
- 震災豫防調査會 (1918) 第十二表 伊豆大島噴火 (日本

噴火志上編). 震災豫防調査會報告, 86, 96-103.
 田沢堅太郎 (1980) カルデラ形成までの1万年間における伊豆大島火山の活動. 火山, 25, 137-170.
 田沢堅太郎 (1981) カルデラ形成までの1万年間における伊豆大島火山の活動Ⅱ. 火山, 26, 249-261.
 東京都防災会議 (1990) 伊豆諸島における火山噴火の特質等に関する調査・研究報告書 大島編. 東京都防災会議, 131p.
 利島村 (1996) 利島村史 通史編. 利島村, 1172p.
 利島村学術研究委員会歴史部会編 (2004) 東京都利島村学術研究集録 第四集 利島村史料集第二巻近世編 2. 東京都利島村教育委員会, 158p.
 山元孝広 (2006) 伊豆大島火山, カルデラ形成期の火砕物密度流堆積物: 差木地層 S₂部層の層序・岩相・年代の再検討. 火山, 51, 257-271.

引用史料

伊豆国葦山江川代官所から幕府勘定所へあてた報告書の控えないし写し:

『伊豆国附島々様子大概書』(安永三年三月) 近藤富蔵編著 (1969) 八丈実記, 2, 緑地社, p 3-39 に収録.
 『安永七戌年御用留』(財)江川文庫所蔵 (国文学研究資料館へ寄託).
 『安永七戌年島方御用留』(財)江川文庫所蔵 (国文学研究資料館へ寄託).
 『大島山火記』内閣文庫本 (国立公文書館所蔵), 水戸彰考館本 (原本焼失) は震災豫防調査會編 (1903) p 367-376 に収録, 同一内容の『伊豆大嶋山焼之一件』(東北大学狩野文庫所蔵) がある.
 『天明三卯年島方御用留』(財)江川文庫所蔵 (国文学研究資料館へ寄託).
 『青ヶ嶋山焼』付八丈島惣人数引取候。付御救伺書』(天明五年八月) (財)江川文庫所蔵 (国文学研究資料館へ寄託).

伊豆大島地役人から江川代官所へあてた報告書:

『寛延二年大島差出帳』大島町史編さん委員会編 (2001) p 12-23 に収録.
 『天明九年大島差出帳』大島町史編さん委員会編 (2001) p 48-65 および, 東京都 (1989) 東京市史稿 産業篇, 33, p 588-624 に収録.
 『弘化三年大島差出帳』大島町史編さん委員会編 (2001) p 248-270 に収録.
 『文政十年大島村々書上帳』大島町史編さん委員会編 (2001) p 120-126; 立木猛治 (1961) 伊豆大島志考, p 174-181 に収録.
 『伊豆七島明細記』中村清二 (1915) p 45-46 に収録.
 利島名主, 百姓が江川代官所へ援助を求めた願書, 救援受取内容の控え, 覚え:
 『麦作大凶作ならば大島山焼砂降につき夫食御拝借款願一件書留』: 利島村学術研究委員会歴史部会編 (2004) 東京都利島村学術研究集録 第四集 利島村史料集第二巻近世編 2, 東京都利島村教育委員会, p 5-12 に収録.
 『御救御拝借御願一件留帳』同上 p 39-50 に収録.
 『御救御拝借小前請取帳』同上 p 53-59 に収録.
 青ヶ島名主から八丈島役人へあてた天明噴火の報告書の

控え, 写し:

『青ヶ嶋諸覚』青ヶ島村教育委員会蔵.
 『御注進書之事』(天明五年三月二十九日) 近藤富蔵編著 (1969) 八丈実記, 2, 緑地社, p 157-160 に収録.
 幕府普請役佐藤玄六郎行信と江川代官所手代吉川義右衛門秀道が勘定所へ提出した伊豆諸島の巡見報告書 (と書かれている):
 『天明二年七島巡見志』東京都公文書館所蔵. 東京都総務局文書課 (1951) 伊豆七島史料, 184p, 大島町史編さん委員会編 (2001) p 29-33 に抄出.

公的編纂史料:

『徳川実記 (常憲院殿御實記卷九)』黒板勝美編輯 (1999) 新訂増補 国史大系 42, (徳川実記第 5 篇), 吉川弘文館, 622p.
 『甘露叢』史籍研究会編 (1985) 改正甘露叢 (一) 内閣文庫所蔵史籍叢刊. 汲古書院, 364 p.

名主・民間人による編纂史料:

『熱海名主代々手控抜書』今井半太夫編 (1956) 熱海郷土文化研究会, 80 p.
 『武江年表』: 斎藤月岑 (2003) 定本武江年表 (中), 今井金吾校訂, 筑摩書房, 361 p, 江戸の町名主・考証家 斎藤月岑 原著 明治 15 年 (1882 年) 刊.
 『南方海島志』秋山 章 (1791) 原著. 近藤富蔵編著 (1969) 八丈実記, 2, 緑地社, p 41-108 に収録. 原著者秋山章は伊豆在住 寛政三年 (1791 年) 刊.

付録

(参考史料) 安永噴火を記録した史料のまとめ

『安永七戌年島方御用留』(財団法人江川文庫所蔵),
 『安永七戌年御用留』(同), 『天明三卯年御用留』(同),
 『大島山火記』(独立行政法人 国立公文書館 内閣文庫所蔵) を翻刻し, 異なる史料を日付順に番号をふって配置した. 『大島山火記』は同内容の『大嶋山火記』(『大日本地震史料』(水戸彰考館本: 原本焼失), および『伊豆大嶋山焼之一件』(狩野文庫本) があり, これらも併せて参照し, 写本により異なる部分は (イ) として示した.

読解の便宜のため原文にはない読点, 並列点を適宜補った. また, □は虫損, かすれ等で解読できない部分, 点は抹消文字を示し, 上書きされている部分はその上の行に示した.

〔(1) 安永六酉年 (1777 年) 『大島山火記』八月十九日〕私御代官所伊豆国附大嶋之内三原山御洞と申所, 餘積廣場所にて草木一切無御座, 小石交之砂土山ニ候處, 當七月廿九日暮時, 地中より火燃出, 四方空より赤煙立, 燒登候音夥 敷聞, 折々地震仕, 時々髪^{おびたたく}の毛より細黒白長サ壹寸位^{へうして}式三寸位有之灰, 并小^{おびたたく}きかなくそ之様成灰降, 當月六日者朝より夜中大雨降候得共, 猶々炎燒音強, 翌七日者別^{べつして}而音強, 灰も度々降, 地震も度々有之, 當月十一日迄鎮不申候故, 嶋中男女共家業相止^{まかり}罷^{まかり}在候段, 同

日嶋人共差出候注進状、昨十八日相届申候、且又神火ニ而、天和年中右山焼候儀有之段申伝候ニ付、穢有之者ハ相除、其餘者嶋中之者共、未明ハ濱邊江罷出垢離を取、鎮守ハ參詣祈願仕候段、注進申越候、依之御届申上候、以上

西八月十九日 江川太郎左衛門 (英征)

御勘定所

~~~~~

〔(2)『大島山火記』安永六年(1777年)八月〕

私御代官所伊豆国附大嶋之内三原山と申所、山焼之儀、嶋役人共々注進申越候趣、別紙を以御届申上候處、毛之降候者、嶋中一統何程降候哉、大造之儀候哉、少々之儀ニ候哉、御尋ニ御座候得共、此度注進ニハ嶋役人共罷出申不申、書面を以申越、委細之儀相知不申候ニ付、右嶋船之船頭方相尋候處、三原山者大嶋之真中ニ有之、四方ニ五ヶ村之村居有之、峯迄凡式里程有之、天和年中神火ニ而山焼之節、峯ニ洞出来、御洞と申伝候由、此度山焼之儀、右御洞より焼出、髪之毛ヨリ細キ黒白長サ壹寸位方式三寸位有之灰、并かなくそ之様成灰降候處、かなくそ之様成灰者、五ヶ村之内二三ヶ村ハ降、毛方細キ灰ハ五ヶ村共不殘降候處、風之吹廻シニより多少御座候由、然共壹寸共溜り有之鉢者無御座、多キ所ニても蜘蛛之巣之ことく溜り有之候段申之候、尤嶋役人共罷出候ハ、相尋候上猶委細之儀可申上候得共、御尋ニ付船頭ハ相尋候趣申上候、以上

西八月 江川太郎左衛門

御勘定所

~~~~~

〔(3)『大島山火記』安永六年九月十九日〕

私御代官所伊豆国附大嶋之内三原山と申所山焼之儀、先達御届申上候處、又候、為注進右嶋年寄老人、當月十二日大嶋出船、一昨十八日江戸着船仕候ニ付、相尋候趣、左ニ申上候

一 右三原山者、大嶋之真中ニ有之、天和四子年より元禄三午年迄七ヶ年之間山焼候節、山上ニ凡拾町四方程之洞穴出来、今以其儘有之、深サ何程可有之哉、難計御座候、當七月廿九日暮時、右洞穴より火氣吹出、夜分者山上一面ニ火氣相見、昼者煙計ニて火氣者相見不申候、山焼強弱有之、焼音夥敷、折々地震仕、髪之毛方細黒白長サ壹寸位より式三寸位有之灰、并小キかなくそ之様成灰降候得共、八月廿五日比迄者差而相替候儀も無御座、同廿七八日者焼音地震共相止、灰も降不申、同廿九日北風ニ而雨降候得共、焼強罷成、九月六日之曉方ハ別焼強、煙り夥敷、焼音雷

之ことくにて、地震も度々有之、同八日より九日夕方迄大風雨ニ御座候處、焼強、九日暮比ハ雨風止候得共、火勢強、焼音も増強、同十二日朝迄ハ相替候儀無御座、灰者降不申候、焼候石砂交、風之吹廻シにより降候儀も御座候段申之候、且又晴天ニハ此節ニ而も殊之外暑ク、極暑同様御座候段申之候

一 島方之者共、農業猟業渡世相休罷在候哉相尋候處、最初ハ焼音ニ恐、男女共罷出兼候得共、長々之儀ニ付、鳴音聞馴候気味も有之、第一相休候而ハ給物無御座候ニ付、天氣能鳴音薄日者、昼之内罷出、作置候里芋・薩摩芋取来、又者薪伐出シ渡世仕候旨ニ御座候、猟業ハ此節鯨猟仕候最中ニ付罷出候得共、山焼にて嶋近所ハ魚寄不申候哉、猟事一切無御座候旨申之候

一 諸作実成方如何御座候哉相尋候處、大嶋ニハ田方無之、山畑冬ハ麦、夏者粟・里芋仕付候處、最早粟者収納仕、此節作物里芋・薩摩芋計有之候得共、山焼火氣當り、又ハ焼石砂降懸り候故、莖者不殘枯失仕候ニ付、土中ノ芋を取入、當時第一之夫食ニ仕候所、是又実入室而悪敷御座候段申之候

一 先月中旬方此節迄嶋方方出船無之儀、山焼故ニ候哉相尋候處、山焼にて猟事無御座、薪伐出方も薄御座候ニ付、荷物少く、其上去月中旬比ハ當月十二日迄順風無御座候ニ付、嶋出船無之、順風さハ御座候得者、山焼故出船不相成と申儀者無御座候段申之候

一 江戸江渡海遠嶋中、夫食差支候鉢之者者無之哉相尋候處、此節ハ粟并芋有之候ニ付、鳴音薄日者罷出、夫食足シ合ニ可成磯餅榮螺・海老之類取、無油断相稼取続候様可致旨、嶋役人共々百姓共ハ精々申渡候付、一同申合、取続之手段仕候段申之候

一 此度山焼之様子、天和年中山焼之節同様ニ候哉相尋候處、天和年中御救米被下置候儀者、嶋役人方ニ書物御座候處、其外之儀者申伝候迄ニ御座候處、山焼之様子、先年同様ニ御座候得共、此度者(狩野本 弱キ方)可有御座旨申之候

一 山焼之儀、山上方火吹出候而も、山々草木并百姓家居近所江火移焼可申鉢ニ者無之哉相尋候處、三原山上上迄凡高式里程可有御座候得共、草木者山之裾通に有之、其餘者岩砂山ニて草木一切無御座、山上洞穴より火吹出候故、山々草木ハ火移候儀者無御座、天和年中山焼之節も、草木并百姓家ハ火移候儀者無之旨申伝候段申之候

右者、大嶋山焼之儀為注進、年寄老人、昨十八日江戸ハ着仕候ニ付、相尋候趣申上候、以上

西九月十九日 江川太郎左衛門 御勘定所


~~~~~

〔(4)『大島山火記』安永七戌年(1778年)三月〕

私御代官所伊豆国附大嶋三原山と申所山焼之儀、去西年十月廿九日夜中鳴も強、焼音も有之、折々細カ成焼砂降り、當正月中旬比者、火気焼音共別而強御座候處、正月下旬より火気焼音共少々鎮り候段、二月十一日出大嶋役人共方注進申越候付、御届申上候、以上

戌三月 江川太郎左衛門  
御勘定所

~~~~~

〔(5)『安永七戌年島方御用留』三月、『大島山火記』十一月に同内容〕

大嶋山焼之儀御届申上候書付

私御代官所伊豆国附大嶋三原山と申所山焼之儀、當月六日、十四日兩度出嶋役人方注進申越候趣、先達而御届申上候處、其後地中焼音追日強ク、雷之鳴候ことくニ而煙立候處、當月十七日夜々殊之外火勢強、焼音弥増嚴敷罷成候由、且又當月^{※1}廿一日^{※2}四時比、三原山方凡式里程隔泉津村之内字葉地釜と申所方、煙立火燃出候段、右村之者共方嶋役人江注進申出候旨、當月廿一日出嶋役人方注進申越候、尤□□様子見定候上嶋役人出嶋仕、委細可申出旨申越候、依之御届申上候、以上

△
^{※3}戌三月 江川太郎左衛門
御勘定所

△右之通
御殿御勘定所へ 御届申上候ニ付申上候、以上

戌三月 江川太郎左衛門
御勘定所

『大島山火記』では、^{※1} 注記なし、^{※2} 下線部なし、^{※3} 戌十一月

~~~~~

〔(6)『安永七戌年御用留』四月〕

私御代官所伊豆国附大嶋燒之義先達而御届申上候處、猶又為注進嶋役人共、此度出嶋仕申出候趣左ニ申上候

三原山と申所、山焼之様子先達而追々御届申上候通ニ而、相替候義無御座候得共、地中焼音強雷の鳴ことく折々地震之様ニ焼音嚴敷御坐候旨申上候

三原山之山上ニ洞穴有之、夫方引続凡壹里四方程者草木生立不申、石も無之砂地ニ御座候處、三月十七日夜方同十九日夜通、右壱里四方之所高凡式丈程方七八間程大石ニ而如<sup>やまのごとく</sup>山ニ築上ヶ候様ニ相成、右築上候石上方四五尺程悉焼石ニ相見候旨申上候

三原山方続候而中之沢と申幅五間程深二丈程有之沢泉津村之内字葉地釜と申所通凡壱里半程之間、三月十九日ニ

一夜ニ大石ニ而深式丈程之所埋、其上高式丈程高大石ニ而石積築立候ことくニ相成、火氣相見煙立、是築上ヶ四五尺程焼石之様ニ相見申候、尤上之石者黒焼候而、鉛に而も解流候様ニ相成、流候跡者なくそのことくニ相見候旨申上候、三月十七日夜後焼音嚴敷日ハ黒キ砂、灰も少々交降候而煙強ク昼中ニ而も如<sup>やまのごとく</sup>闇夜御座候、尤皆々右之通ニも無之、五六ヶ月ニ右躰御座候旨申上候、右焼砂灰降掛候故、麥作出穂無之枯、植付候芋芽出不申候ニ付、掘見候得者芽方腐候旨申上候、薪伐出又者夫食足合ニ仕候山草奥山ニ而、重々取候所、奥山江之道筋通路不出来、且又焼音明り強キ故ニ候哉、嶋近所江魚も出不申、漁業無御座候得共、去冬中御救夫食被下候而、嶋中一同當時無難ニ罷在候旨申候、火気強場所近邊之立木者當春芽葉出不申枯可申躰ニ相見候旨申上候

右者大嶋山焼為注進、右嶋神主并年寄老人此度出嶋仕申出候趣、前書之通御座候、右山焼神火と申伝候ニ而、穢無之もの共者濱邊へ罷出、一同垢離を取、祈願仕罷在候段申上候、別□紙籠絵図相添申上候、以上

戌四月 江川太郎左衛門  
御勘定所

~~~~~

〔(7)『安永七戌年島方御用留』六月十八日〕

大嶋山焼之儀御届書

私御代官所伊豆国附大嶋山焼之様子、右嶋役人共注進申出候趣、當四月廿三日御届申上候、然處、五月上旬比方焼静候様子ニ御座候處、追日焼音鎮り夜半明りも段々薄罷成、五月中旬比方夜中間々少々夜明り有之候迄ニ而焼止り可申様子ニ御座候段、五月廿一日出、六月十一日出兩度嶋役人共方注進書差越申候、依之右之段御届申上候、以上

△
戌六月十八日 江川太郎左衛門
下中ノ間 御勘定所

△右之通
御殿御勘定所へ御届申上候ニ付申上候、已上
御殿 戌六月十八日 江川太郎左衛門
御勘定所

~~~~~

〔(8)『安永七戌年島方御用留』九月〕

大嶋山焼之儀ニ付御届候書付

私御代官所伊豆国附大嶋三原山と申所山焼之儀、當五月中旬迄者少々宛夜中間々明り有之候所、當時ニ而者一向焼不申夜中明り茂不仕候間、最早焼止り可申様子ニ御座候段、八月八日出右嶋役人共方注進申越候、依之御届申上候、以上

戌九月 江川太郎左衛門

御勘定所

~~~~~

〔9〕『安永七戌年島方御用留』九月二十四日

大嶋山焼之儀ニ付申上候書付
私御代官所伊豆国附大嶋三原山^と申所、山焼之儀段々相鎮り、〔此節ニ而者〕一向焼不申、夜中明り茂不仕候間、最早焼止可申様子ニ御座候段、當八月八日右嶋役^方之注進書之趣、先達而御届申上候処、又候、當月八日朝煙立登り焼音凄凉相聞、夜中明り強翌九日之夜者明り夥敷白昼之如ニ而、地震^茂時々少々宛仕候段、右嶋役人^方注進申越候、依之御届申上候、以上

戊九月廿四日 江川太郎左衛門
御勘定所

右之趣
御殿御勘定所へ御届申上候ニ付申上候、以上

~~~~~

〔10〕『安永七戌年島方御用留』十月六日、『大島山火記』十月六日に同内容

伊豆国附大嶋山焼之儀申上候書付  
私御代官所伊豆国附大嶋三原山<sup>と</sup>申所山焼之儀、段々焼止可申様子ニ御座候処、當九月八日朝<sup>方</sup>又候焼候段、右嶋役人共<sup>方</sup>注進申越候趣、去月廿四日御届申上候<sup>〇</sup>処、其後<sup>〇</sup>殊之外焼強夜中明り夥敷煙大分立登音凄凉、大石を落シ候音地響仕、三原山未申之方焼崩レ、夫<sup>方</sup>右嶋之内差木地村・野増村之間赤沢<sup>と</sup>申沢<sup>江</sup>焼出、右之沢凡幅三間程、深サ<sup>丈</sup>四五尺程御座候処、大石崩落、沢を埋、其邊之草木不残焼失仕、右近所野増村之畑、火氣ニ而作物不残枯候由、右赤沢長凡海邊<sup>迄</sup>三里程有之、差木地村・野増村之間ニ御座候処、大石ニ而埋候ニ付、両村往来相成不申候由、且又木之葉焼候灰、嶋中五ヶ村共降り申候由、右山焼神火<sup>と</sup>申伝候ニ付、村々之男女未明<sup>方</sup>濱江出、垢離を取、其村々之鎮守江祈願仕罷在候由、右嶋役人<sup>方</sup>注進申越候付、籠絵図相添右之趣御届申上候、已上

六日  
戊十月四日 江川太郎左衛門  
御勘定所

右之趣  
御殿御勘定所へ御届申上候ニ付申上候、以上

戊十月四日 江川太郎左衛門  
御勘定所

※下線部 『大島山火記』では、「尤、先達而ハ中野澤と申處へ焼出申候、右場所ハ當時焼止、此度ハ赤澤と申處へ焼出昼夜共ニ」

~~~~~

〔11〕『安永七戌年島方御用留』十月十三日付 十月十六

日差出、『大島山火記』十月十三日に同内容

大嶋山焼之儀注進趣申上候書付
私御代官所伊豆国附大嶋三原山^と申所山焼之儀、右嶋役人共^方注進申越候趣、當月六日御届申上候処、

右注進申越候後同嶋
又候去月下旬泉津村^方道法^〇壺里半程東之方ごみ沢^と申沢^江焼出し、右沢之儀者、三原山^方海邊^迄長三里程有之候内、壺里程焼下り、夫^方左右壺里程焼廣カリ、海中江焼石押出、波打際^方沖江^町計水上炎夥敷燃、高式間程、横幅壺里程、大石ニ而築上申候段、且又焼音昼夜大雷之如ク鳴、地響強、夜中明り凄凉、廣煙、嶋中男女驚入、垢離を取、鎮守江祈願仕罷在候段、右嶋役人共^方九月廿七日出嶋船便注進申越候ニ付、籠絵図相添御届申上候、以上

戊十月十三日 江川太郎左衛門
御勘定所

右之趣
御殿御勘定所江御届申上候ニ付申上候、以上

十六日
戊十月十四日 江川太郎左衛門

下中ノ間 御勘定所

~~~~~

〔12〕『安永七戌年島方御用留』十月

伊豆国附大嶋家数人別定納書付  
覚  
伊豆国附  
東西式里半  
大嶋 南北五里  
江戸<sup>方</sup>海上三拾六里  
相州三崎<sup>方</sup>海上拾八里

家数四百九拾四軒  
人別式千貳百九拾八人  
外五人 流人并嶋出生子供  
外寺七ヶ寺  
一 金 四拾三兩貳分永二百拾七文 諸運上定納  
一 金 貳拾兩三分永百五拾文 船拝借返納  
一 米 九石四斗三升六合六勺 但老ヶ年分  
夫食返納  
但右同断

是ハ冬御張紙直段を以金納仕候  
右御尋ニ付申上候、以上  
戊十月 江川太郎左衛門  
御勘定所

~~~~~

〔13〕『安永七戌年島方御用留』十月十五日

一 三原山^方ごみ沢^と申所江焼出海中江大石筑上ヶ候儀、山上ニ有之候石ころひ落候哉、又者山上之土中^方吹

出候哉、相^{ただし}糺可申上旨御尋之趣承知仕候、三原山之義、右牀大石山上ニ有之候様子ニも相見江不申候由ニ御座候所、此度焼出候大石之義者山上土中^た吹出候儀ニも可有之候哉ニ奉存候、併右山焼之義者神火与申伝候ニ付嶋中恐入、近所江茂參不申、山焼之様子相互ニ出合も不仕候由ニ御座候、且又風様ニより砂并灰^た採降、其外時々鳴音強キ節者戸障子江響候由ニ御座候

- 一 こみ沢方海中江吹出筑上ヶ候大石と申岡ハ如何程大サ有之候哉、船頭共及見候趣相糺可申上旨被仰渡奉畏候、右筑上候趣大石与奉存候得共、焼出候近邊火氣鳴音強御座候ニ付、中々近所江罷越候義難相成段、書面ニ申上候茂、遠見ニ而申上候ニ付、石之大小之義相知不申候段申之候、右者此度江戸表江薪積參候船頭共相尋候趣御尋ニ付奉申上候、以上
- 戊十月十五日 江川太郎左衛門手代
田中寿兵衛

〔14 『安永七戌年島方御用留』十月十五日〕

江川太郎左衛門御代官所伊豆国附大嶋山焼之儀ニ付、兼而手當申渡方并大変之義ニ付見分差遣シ可然旨、并右嶋船彼地ニ居合不申候節、急注進等不相成段ニ及ひ候而ハ不相□□候趣御尋御座候ニ付、左ニ奉申上候

- 一 居村近所方焼来候節者嶋中村々申合、相互助合候様兼而嶋役人共ニ申渡置候
- 一 山焼之義ニ付、強ク焼候而も数日同様之義も無之、是迄強弱も御座候ニ付、此上注進之趣ニ随ひ見分之儀も奉申上候積御座候
- 一 大嶋船数式拾艘程有之、漁業之品数等^{さし}指出し候而も相残候船嶋□□繫候儀無御座候、尤里数近キ嶋々御座候間格別風□□様患敷義無御座候得者、注進差支無御座候ニ付□段ニ及ひ候儀者無御座候

右御尋ニ付留守居之者奉申上候、以上
戊十月十五日 江川太郎左衛門手代
田中寿兵衛

〔15 『安永七戌年島方御用留』十月十六日〕

- 一 大嶋焼方之様并何方者當時火勢強候哉之事
- 一 字中之沢、字赤沢与申処焼候所又候ごみ沢与申所焼候由、左候得者嶋内三ッニ相成候、往来差支、嶋内ニ而互之助合も成兼可申事
- 一 少々者火氣不屈方之田畑者用立、草之葉等、食事之助ニ茂相成、魚漁等も少々者有之、薪等伐出候事も相成候哉之事
- 一 當時焼出候所者、人家無之方与相聞候、人家よりハ何程隔有之哉之事

- 一 地中之焼候儀、万一人家有之候方江、焼出、急ニ百姓共立所ニ迷ひ候様成儀者有之間鋪哉、若左様之節者如何様取計、急難を救ひ候手當ニ相成哉之事
- 一 嶋中之人別も式千餘之儀ニ候処、嶋船式拾艘ニ而ハ、急ニ右之人数為立退候儀も相成間敷候、其節之手當之事
- 一 嶋追往返之船便り差支無之、急難之間ニ合候様ニ取計方之事

戊十月十六日
右、辻左衛門様御渡被成、田中寿兵衛請取来候
~~~~~  
〔16 『安永七戌年島方御用留』十月十六日〕  
此御沙<sup>(k)</sup>書外之儀御口上ニ而左様御尋被仕候趣、日記ニ有之候  
伊豆国附大嶋山焼ニ付為覚之申候、手代老人宛右嶋へ差遣可申旨被仰渡、御書付老通御渡被遊奉請取候、<sup>あまはされうけとりたてまつり</sup>  
<sup>なるべくだけさいそぎ</sup>可成丈差急右御書付之趣相心得見分仕候様被仰渡候趣奉畏候、右為御請奉申上候

戊十月十六日 江川太郎左衛門手代  
田中寿兵衛

〔17 『安永七戌年島方御用留』十月十七日〕

大嶋山焼見分手代書上候御届書 御殿中ノ間江十七日出ス  
覚

- 一 戊 手代 柏木直左衛門  
小者老人  
書役 井戸 惣蔵  
小者老人

右者私御代官所伊豆国附大嶋山焼為見分書面之通、右嶋忠<sup>●</sup>三郎船五人乗之船ニ而明後十九日江戸川出帆為仕候、依之御届申上候、以上  
戊十月十七日 江川太郎左衛門  
御勘定所

〔18 『安永七戌年島方御用留』十月十七日〕

伊豆国大嶋忠三郎船<sup>(船水主)</sup>□□□五人乗外<sup>びんせん</sup>便船人之事  
一 便船老人 手代 當戊五拾式才  
柏木直左衛門  
惣身無疵  
一 便船老人 右同人小者 當戊三十才  
六助  
惣身無疵  
一 便船老人 書役 當戊二十七才  
井戸 惣蔵

惣身無疵  
 一 便船主人 右同人小者 當戌三十二才  
 久助  
 惣身無疵  
 人数合九人乗 但船頭水主便船人共  
 右者伊豆国附大嶋山焼ニ付見分御用被 仰付候間、大嶋込  
 差遣 申候相模国浦賀御番所無相違御通被成可被下候、  
 右便船人ニ付出入之儀も御座候ハ、私共申分ヶ仕  
 候、為 後日 仍 如件

安永七年戌十月十七日 江川太郎左衛門之内  
 在□ 及川東藏  
 田中寿兵衛  
 相模国浦賀  
 御番所  
 御當番衆中

〔19 『安永七戌年島方御用留』十月十七日〕  
 伊豆国附大嶋山焼見分爲御用右嶋船ニ而我等手代明後十九日江戸川出帆申付右嶋江渡海爲致候、渡海之内若風様悪ク何連之浦々江漂着いたし候とも、最寄浦々方別船等差出右御用船別条無之様可取計候、且又於其所ニ雇船其外御用之儀有之候者手代行次第可相違候、聊 鹿 略 無之様可致候、以上

安永七年戌十月十七日 江川太郎左衛門 嶋印

|      |                     |
|------|---------------------|
| 浦触   | 江川太郎左衛門             |
| 上包八寸 | 江戸芝金杉浦方<br>伊豆国迄海邊浦々 |

江戸芝金杉浦□□  
 武藏  
 相模 国浦々  
 伊豆

名主  
 年寄

追而此浦触順能早々継送、伊豆国海邊通り留り村々豆州韭山我等役所へ可相返候、以上

〔20 『安永七戌年島方御用留』十月二十日〕  
 大嶋山焼見分手代出帆御届書  
 覚

一 戌十月十九日 乗船 柏木直左衛門 小者主人  
 同廿日卯刻 出帆 小者主人  
 書役 井戸 惣藏 小者主人

是者  
 御殿中之間江御届申上候

右者私御代官所伊豆国附大嶋山焼爲見分差遣候者共、右嶋忠三郎船頭水主五人乗之船ニ而書面之通乗船江戸川出帆仕候ニ付、御届申上候、以上

戌十月廿日 江川太郎左衛門  
 御勘定所  
 御殿御勘定所 壹通  
 下中之間 壹通

〔21 『安永七戌年島方御用留』十一月付、十一月二十五日差出、『大嶋山火記』十一月に同内容〕

伊豆国附大嶋家数人別百姓渡世大概帳書付  
 覚

無高 大嶋 東西式里半  
 南北五里程  
 江戸方海上三拾六里程  
 相模国三崎方□□□□

家数五百拾八軒  
 此人別式千貳百九拾八人  
 内 五人 流人并出生子供  
 社三十七ヶ所  
 外 寺三ヶ寺  
 堂四軒

一 薪伐出江戸廻 五ヶ村共年中  
 渡世ニ仕候  
 里芋  
 一 薩摩芋 五ヶ村共 夫食に仕候  
 粟少々 切替畑江作り  
 麦少々  
 いたとり  
 一 ところ 五ヶ村女子共、<sup>イ番中</sup>□□  
 山の芋 山稼ニ而、夫食足合仕候  
 あしたば

一 鰹釣魚 新嶋・岡田式ヶ村ニ而夏ニ漁仕候

一 鱈 網漁 右式ヶ村ニ而秋漁ニ仕候

一 海苔 右式ヶ村女子共、冬中  
 はんば 磯ニ而相稼、夫食足合ニ仕候



一 四季共格別替り候儀無御座候共、<sup>イ</sup>風ハ<sup>ハ</sup>部<sup>片</sup>吹<sup>ニ</sup>而  
時々大風仕候

一 此村、国地百姓之<sup>イ</sup>躰<sup>共</sup>ニ而平日渡世相應ニ 新嶋村  
相成候、村方ニ御座候 岡田村

一 此三ヶ村之内、差木地・泉津式ヶ村者、 野増村  
男<sup>イ</sup>ハ<sup>ハ</sup>惣髮<sup>ニ</sup>而一躰<sup>ノ</sup>之村柄も新嶋・岡田 差木地村  
式ヶ村<sup>ノ</sup>違、平日渡世困窮成村方ニ御座候 泉津村

一 医師無御座候

一 鳶鷹雀数多有之、<sup>イ</sup>鳴<sup>少</sup>々有之候

一 羊凡千疋余

一 野馬凡<sup>イ</sup>百<sup>六</sup>疋余

一 野牛凡式百疋余

右大嶋五ヶ村之内、新嶋・岡田両村之儀者、濱附之村方  
ニ而、廻舩漁舩茂御座候間、山海之稼も仕候ニ付、渡世相  
應ニも相成候趣ニ御座候、且野増村・差木地・泉津三ヶ  
村者、年中山稼之外、渡世致方無御座、別而困窮之躰ニ相  
見申候

右者、大嶋山焼為見分渡海仕候手代共相糺させし趣、書  
面之通御座候、依之申上候、以上

戌十一月 江川太郎左衛門  
御勘定所

イ 右之通御座候 以上

御殿御勘定所江戌十一月廿五日差出

~~~~~

〔22〕『安永七戌年島方御用留』十一月付、十一月二十五
日差出、『大島山火記』十一月に同内容〕

伊豆国附大嶋山焼見分吟味仕候ニ付申上候書付
私御代官所伊豆国附大嶋山焼之儀、去西七月廿九日^ノ焼
出、強弱者御座候得共、焼止不申候処、當九月十八日、同
廿六日両日者、別而強焼出候旨、嶋役人共注進申越候間、
御届申上候処、見分之者差遣候様被仰渡、則手代差遣見
分為仕候趣、鹿絵図相添左ニ申上候

天和四年子二月十六日

一 三原山御洞焼出跡、此度焼出候 壹ヶ所

天和四年子三月八日

三原山御洞^ノ壹里程下寅之方

一 字小釜瀧下^ノ海邊焼出候跡、 壹ヶ所
當時、字新筑出^ニ申伝候

安永六年西七月廿九日

一 三原山御洞焼出口 壹ヶ所

安永七年戌三月廿二日 長壹里程

一 三原山御洞^ノ字中野沢 但 幅拾間程 壹ヶ所
深サ拾五六間

安永七年戌九月十八日 長壹里半程

一 三原山御洞^ノ字赤沢 但 幅七八間程 壹ヶ所
深サ三拾間程

安永七年戌九月廿六日 長式里程

一 三原山御洞^ノ字こみ沢 但 幅三町程 壹ヶ所
深サ三間程

右者大嶋三原山御洞之儀、去西七月廿九日^ノ焼出、山中
鳴音強火勢立登、焼音敵敷日者、黒砂ニ灰少々交降候而震
動仕候処、當三月廿二日、御洞^ノ字中野沢与申所江焼出候
処、其後五月^ノ静ニ相成、御洞之内黒煙立登り、火勢
少々宛相見候得共、百姓共五月^ノ八月上旬迄者山稼等も
仕罷在候処、又候八月下旬^ノ御洞^ノ焼出強罷成、九月十
八日、字赤沢与申所江焼出、夫^ノ同廿六日字こみ沢与申所
江焼出申候処、いまた右式ヶ所之儀、火氣煙強御座候、且
右御届申上候節、御書付を以被仰渡候趣、相糺、左ニ申
上候

一 大嶋三原山焼方之様子、并何村者當時強焼候哉可申
上旨、御尋ニ御座候

此段、三原山御洞与申所、凡東西三町余、南北十町
程ニ而、深サ之儀者何程御座候哉、嶋役人共も不奉
存候由ニ御座候、尤右御洞与申所を三原大明神与
唱、嶋中惣鎮守与申伝候由ニ御座候、此洞之内^ノ
天和四子年^ノ焼出、元禄三年年迄七ヶ年之内焼出
候処、年ニ寄焼方強弱も有之候由、嶋中ニ而申伝
候段申之候、然處去西七月廿九日、右御洞^ノ焼出、
夫^ノ火勢強弱御座候得共、焼止不申候、併中之沢
者相鎮り、赤沢・こみ沢も焼止り候様子ニ御座候
得共、今以火氣強御座候、右躰段々相鎮り、當時
御洞之内計焼候而、日夜煙立登り候得共、一躰相
鎮り候方ニ而、居村込砂灰等降候程之儀も無御座
候、尤村々^ノ凡壹里半^ノ三里位迫隔候場所ニ御座
候

一 字中之沢・赤沢与申所焼、夫^ノ又候こみ沢与申所江焼
出候段、左候得者嶋中三ツニ相成、往来差支、嶋中ニ
而互之助合も成兼可申旨、御尋ニ御座候

此段、當戌三月廿二日、三原山御洞戌亥之方焼崩、
夫^ノ字中野沢江焼下、泉津村^ノ東之方、右村^ノ平
日百姓稼山江參候道中^イ下ニ而焼止申候、尤人家
^{ミチノ}ノ道法凡拾八九町程相隔申候、且九月十八日、御

洞方未申の方焼崩、夫方野増村・差木地村之間、字赤沢与申沢江焼下申候、右赤沢之内焼止候場所迄、両村方道法寺里程宛相隔申候、右沢之裾通り海端迄之間、當時ニ而者通路相成候様罷成候間、嶋中ニ而相互之助合等差支無御座、且又同月廿七日、御洞方丑寅の方、夫方字こみ沢与申沢江焼下り、是者海邊江焼出、磯方海江凡長壱町程、横拾町余茂有之、焼出高サ之儀者海中水上ニ而凡五六間程も高ク相見申候、此所波打際ニ而未黒煙立登申候、右場所者大嶋裏山ニ而嶋嶮ニ御座候間、元米村居茂無御座、泉津村稼山ニ而、外村々江者道筋茂無之、通路不仕場所ニ御座候

- 一 少々者火氣不屈方之田畑者用立、草之葉等、夫食助合ニも相成、魚漁等も少々者有之、薪等伐出候儀茂相成候哉之旨、御尋ニ御座候

此段、大嶋之儀、田方無御座、畑方之儀も芝山杯年々切替ニ仕候、嶋内五ヶ村御座候処、新嶋・岡田右式ヶ村之儀者、火氣不屈畑ニ御座候間、里芋・薩摩芋其外草之葉、夫食足合ニ取入申候、尤薪伐出、并漁業茂有之村方ニ御座候処、漁業之儀者、山焼之音海江響有之哉、去秋中の方漁業薄ク相成申候、且又山焼不強節者、日々山稼も仕、其上嶋中の方伐出候薪、江戸表江積出シ相稼候村方ニ而、此節茂石品々相稼渡世仕候、且又野増・泉津・指木地、右三ヶ村者、山稼専之村方ニ而、漁業等不仕、作物仕付候揚所も、前書式ヶ村方少御座候処、右赤沢・こみ沢江焼出候火氣煙等懸り候故、別而突入不^{よろしからず}宜候得共、里芋・薩摩芋共少々収納仕候、且又山焼不強節者、日々罷出、薪伐出、江戸表江相廻し候得共、焼石押出、稼場少罷成申候

- 一 當時焼出候所者人家無之方与相聞候、人家方者何程隔有之候哉可申上旨、御尋ニ御座候

此段、三原山御洞方焼出、人家御座候処迄者、村々何れニ茂道法凡壱里半方三里位迄相隔申候

- 一 地中之焼候儀、万一人家有之候方江焼出候ハ、急ニ百姓共立所ニ迷^{ごきあるまじくぞんじたて}ひ候様成儀者有之間敷候哉、若左様之節者如何様ニ取計、急難を救ひ候哉、手當可相成候哉可申上旨、御尋ニ御座候

※_a 此段、新嶋・岡田村之儀、三原山方西北ニ當、よせの腰与申山ニ而相隔、急難之儀者有御座間敷存^{ごきあるまじくぞんじたて}奉候、野増・泉津・指木地三ヶ村之儀、新嶋・岡田式ヶ村与違、三原山方よせの腰同様焼出防ニ相成候山も無御座候間、新嶋村江引越候様吟味仕候^{ごきあるまじくぞんじたて}処、當時山焼も格別静ニ相成、殊更居村ヲ離^{ごきあるまじくぞんじたて}候而者、第一稼方差支、渡世難相成候ニ付、引移之儀御免相願申候、※_b 尤此上山焼強相成候節者、新

嶋村江引移、万一山焼之様子ニより通路差支候節者、新嶋村ニ相残候廻船、并漁船を以、引移らせ候積、手當申渡置候、一舩山焼之儀、神火与唱、居村焼候儀者無之旨、前々方申伝安堵仕罷在候旨、申之候

- 一 嶋中人数茂式千余之儀ニ候処、嶋船式拾艘ニ而者、急ニ右人数為立退候儀も相成間敷候、其節之手當之儀可申上旨、御尋ニ御座候

此段、前條ニ申立候通、新嶋・岡田両村者、よせの腰与申山ニ而相隔候ニ付、御洞方焼下り候儀茂御座有間敷相見申候、野増・泉津・指木地三ヶ村之内江、若民家迄危舩ニ焼出候儀も無御座候ハ、無難之村方江引移、早速注進申出候様申渡置候、尤^{よせ}嶋方廻船式拾艘程之内、江戸表江薪積出候而茂五六艘宛ハ嶋方ニ残有之候間、万一路路絶切候様ニ焼出候節者、右船相廻シ候^{よせ}怪我不仕様取計之儀、得^{よせ}与手當申渡候

- 一 嶋迄往来之船便差支無之、急難之間ニ合取計方可有之哉可申上旨、御尋ニ御座候

此段、前條之通、薪等江戸表江積来候廻船、嶋方江積帰^{よせ}り候穀物等、江戸表ニ而買調候間、逗留仕居候ニ付、嶋迄往来之船便差支無御座候、且又^{よせ}嶋方方江戸表江渡海之儀者、嶋方残り有之候廻船、其外漁船等茂御座候間、是又船便差支之儀無御座、急難之儀有之候^{よせ}も間ニ合候儀ニ御座候

右者、私御代官所伊豆国附大嶋山焼為見分手代差遣、彼地見分之上被仰渡之趣を以、嶋役人共相糺候処、書面之通御座候、且又山焼之儀段々相鎮り、當時ニ而者沢々者焼止り、御洞計昼夜焼申候、中之沢之儀者相鎮り、赤沢之儀茂火氣煙者今以御座候得共、道上ニ而焼止り候ニ付、通路差支茂無御座、こみ沢之儀者、今以火氣有之、其上海表迄焼出候得共、是者居村無之方ニ御座候間、常々も通路不仕場所ニ御座候、併右沢々焼候節、泉津・指木地・野増三ヶ村相稼候山谷江焼石押出シ、稼薄罷成、新嶋・岡田両村者、船持共有之候村方ニ而、嶋中の方伐出候薪積送り、或者山稼、其外漁業仕来候処、薪出方少罷成、其上漁業薄難儀仕候得共、去西十一月下旬方當五月中迄、御救被下置候ニ付、無難ニ取続罷在候段、嶋中一同挙而難有仕合奉存罷在候、作物之儀茂右山焼故、平年之通ニ者出来不仕候得共、麦作・里芋・薩摩芋之類収納仕候間、當年中之夫食取続之義者、可成ニ可行届舩ニ御座候、依之見分之趣、龔絵図相添申上候、以上

戊十一月

江川太郎左衛門

御勘定所

御殿御勘定所江戊十一月廿五日差出

~~~~~  
〔23 』安永七戌年島方御用留』十二月〕

伊豆国附大嶋山焼之儀ニ付申上候書付

伊豆国附大嶋之内、<sup>※</sup>新嶋・岡田両村附濱方ニ年中五六艘宛罷在候廻船之儀、何人程乗組候哉、且又、右船ニ而何百人程積乗候儀相成候哉、御尋ニ御座候

大嶋廻船之儀者、船頭水主六人乗方四人乗込御座候、尤急難之儀出来仕候ハ、諸荷物同様ニ積乗仕候ハ、<sup>※</sup>廻船壹艘ニ式百人程ツハ積乗可申候哉ニ奉存候、尤右両村ニ御座候漁船ニ拾艘余之儀、是又、壹艘ニ凡人数三拾人程者積乗可申候哉奉存候、万一急難出来候ハ、右廻船・漁船ニ乗出仕候ハ、一先立退候儀者相成可申候哉ニ奉存候、尤右手當等之儀者、私共見分之節、嶋役人共江申渡候、右御尋ニ付奉申上候、以上

戊十二月 江川太郎左衛門手代  
柏木直左衛門

~~~~~  
〔24 』安永七戌年島方御用留』十二月四日〕

大嶋山焼之儀ニ付申上候書付

大嶋山焼之儀ニ付昨日出役手代江御尋候趣取調、今日書付可差出旨被仰渡候處、取調出来不仕候間、明日差出候様可仕候、右之趣御聞濟被成下候様仕度奉存候、依之申上候、已上

御殿 戊十二月四日 江川太郎左衛門
御勘定所

~~~~~  
〔25 』安永七戌年島方御用留』十二月三日〕

伊豆国附大嶋山焼之儀ニ付申上候書付

覚

積石高極り無御座候

一 廻船五六艘 但 四人乗方  
六人乗込

但 壹艘ニ付式百人程宛

此人数千式百人程乗候積

一 漁船三拾六艘 但 四尋方  
六尋迄

但 壹艘ニ付三拾人程宛

此人数千八拾人程乗候積

右者大嶋之内新嶋・岡田両村附濱方ニ、年中揚置候廻船・漁船之分、書面之船数御座候間、<sup>※</sup>若急難御座候節者、無油断右船ニ乗セ近嶋利嶋・新嶋・其外伊豆相模国浦々江乗附、注進可申越旨先達而見分ニ差遣候手代共嶋役人共江急度申渡置候、且又<sup>※</sup>野増・差木地・泉津三ヶ村之義者、三原山御洞方不直候ニ付新嶋村江引移候様申聞

處、<sup>き</sup>左候<sup>而者</sup>凡人数五百人程渡世ニ差支、其上右百姓共居小屋取繕仕候義も入用等相懸り候義ニ附急ニ者<sup>で</sup>出来兼候間、何卒是越之通被差置被下候様強<sup>而</sup>相願申候、<sup>※</sup>然共此上先達而字こみ沢江燒出候同様ニ候ハ、入用相懸り候共嶋役人并船持共差働新嶋村江為引移、其段可申越旨嶋役人共江急度申渡置候、尤右三ヶ村之義者濱附ニ無御座候間急難之節船ニ而立退候儀不相成儀も御座候ハ、山越ニ而新嶋・岡田両村之内江立退候様申渡置候得共、見分手代共右嶋出船渡之様子申越次第、早速両村之内江引越候様可申渡奉存候、尤五ヶ村一同急難出来候義も有御座候間、右之内一ヶ村、二ヶ村急難之義御座候共、前書之通手當申付候間、差支候義者有御座候間敷奉存候

一 <sup>※</sup>見分ニ差遣候手代者去月十二日大嶋出帆仕候處風様悪敷、伊豆国川奈村へ入津仕候處江戸表江之日和無御座候ニ付、右村方陸路江戸表江罷歸り候ニ付伊豆相模国海邊通ニ而大嶋見請候處、御洞之通者火勢相見江、今以海邊通江者火勢相見江申候間、<sup>定</sup>而山稼之義薄相成申候哉ニ奉存候、左候而者来春取続之程無覚束奉存候間、御救相伺候儀可有御座候、併右為見分先達而差遣候手代共、大嶋引払候後者、薪積船成入津不仕候ニ付、山稼之義得と相知不申候間、此上薪積船着船仕候ハ、船頭共相糺シ山稼之様子并渡世之義、猶又可申上候

一 此上弥増燒強相成候儀も有之候段嶋役人共方申越、急難無心元趣<sup>こころもとなき</sup>も御座候ハ、其段申上猶又手代共差遣手配可為仕奉存候

一 大嶋方新嶋江海上十里程、利嶋江海上七里程御座候處、新嶋ニ廻船六人乗四艘、五人乗壹艘、三人乗り拾式艘程、利嶋ニ廻船四人乗壹艘、三人乗壹艘、<sup>※</sup>両嶋ニ船数拾九艘程御座候ニ付、右之内嶋方居合船者勿論、江戸渡海之船、伊豆相模国浦々ニ船懸居候船々共大嶋急難之節者乗付申候様手當可申付奉存候得共、右嶋々廻船當時江戸着船無御座候ニ付、此上船便次第右両嶋役人共江申付候積御座候

右者大嶋山焼之儀、御尋ニ付申上候、尤為見分差遣候手代共右嶋出船後之様子申越次第、猶又申上候様可仕候、以上

戊十二月三日 江川太郎左衛門  
御勘定所

~~~~~  
〔26 』天明三卯年島方御用留』(1783年)十二月〕

伊豆国附大嶋山焼之儀御届書

伊豆国附大嶋山焼之儀、近年相鎮り申候處、先月二日之夜、字三原山洞之内鳴動仕光強、同四日适同様ニ而火氣盛ニ相見候由、勿論先年程ニ者無御座候得共、嶋中江砂

降、當冬蒔附候麦并菜・大根之葉江懸り、硫黄之氣強御座候故歟、都而葉物者枯失候由ニ御座候、併 蕪・大根等迤根ニ傷ミ不相見候間、來正月中者夫食差支有之間敷段、嶋役人書付差出申候、依之御届申上候、已上

卯十二月 江川太郎左衛門

御勘定所

右之通

御殿御勘定所江御届仕候、依之申上候、已上

卯十二月 江川太郎左衛門

御勘定所

八寸 伺方 壺通
後取留 壺通



〔27〕『天明三卯年島方御用留』（1783年）十二月〕

大島山焼之様子申上候書付

私御代官所伊豆国附大嶋焼之儀、先月中者平生之煙立相見候處、當月十日比之焼様別而敵敷、屋之内者夕立懸候様ニ空江煙相立、夕方之者火之手相見、此節ニ至り同様ニ而、折節者震動又者障子江響候程之儀も有之、砂灰降候儀者無之、全体近比之風様ニ而東江斗吹払候様相見申候、焼山之頂上焼砂ニ而も積候哉、已前之者高ク相見申候

一 此節之焼様者、去ル亥年大焼之様子同様相見候得共、其節之者焼石様之物吹上候、□少ク相見外ニ相□儀無御座候、右者豆州賀茂郡稻取村・片瀬村邊ニ而及見候趣御届申上候、以上

卯十二月

江川太郎左衛門



（編集担当 及川輝樹）